次のステップへ踏み出そう

石田博樹（長岡工業高等専門学校）

高専に着任して、18 年が過ぎた。　高専に来て以来、ずっと、私の脳裏を離れずにいることは、大学進学を目指している同世代の高校生、大学に通う同世代の学生、さらにまた、私自身の同年代の頃と、高専の学生との比較である。教育の内容、心身の発達、将来への希望、等、いろいろな面で比較し、考えさせられてきた。高専に来た当時は幼かった自分の子供達が、今では、高専の学生の年齢と同じくなってきたために、それは、今日、いっそう現実味を帯びてきた。

高専は大学の縮図（かなり小さいが）である。私にはそう見える。進級問題、卒業、進学、就職、アルバイト、異性関係、友人との付き合い、等、5 年間の高専生活の中で突き当たることと、そっくり同じものが大学生活 4 年間にもある（ただし、もちろん、その逆は言えない）。高専の学生が突き当たり、悩むことには、大学の学生も突き当たり、悩んでいる。大学に長くいた私には、それを痛感させられる。　普通の高校生は、18、９歳で大学の環境に入る。一方、高専の学生は、中学校卒業後の 15 歳で大学の縮図という環境に入るために、何か壁に突き当たった時の本人の対処の仕方が難しいのである。

入学早々、寮や部活の先輩から、楽勝科目と難関科目の情報をしっかりと仕入れ、定期試験を要領良く「かわす術」を覚える人もいるだろう。学業よりもアルバイトに精出し、酒、タバコ、パチンコ、マージャンを覚える人もいるだろう。毎年の学年末には、各教官にお百度参りをし、首尾良く 60 点以上の平均点を獲得し、進級を確保してホッとすることを繰り返している人もいるだろう。卒業後の進路や、異性関係、友人との付き合いで、悩み、迷っている人もいるだろう。どれをとっても、昔から、大学に通う学生も同じである。教官の多くもその道を通ってきた。もちろん、私自身もこれらの中のいくつかを体験してきた一人である。

でも、ここで、ちょっと待って欲しい。１５歳からの５年間に、安っぽい「処世術」をしっかりと身につけ、小利口になって老成した人間になって欲しくない。高専における学生生活を、そんな使い方にしないことを望みたい。自分を安売りせず、もっと大事にし、必ず、次のステップを目指して欲しい。

私自身について言えば、15 歳からの 2 年半は、高校入学の直後に入部したボート部の練習で、毎日毎日クタクタに疲れて帰宅していた。一方、生徒全員が大学進学を目指していたために、教室では基礎学問の科目の授業が急ピッチで進行していた。定期試験と実力試験が頻繁にあり、その度に常に席次が出された。必死について行かなければ、周囲に遅れ、果ては落ちこぼれるかも知れないという不安を抱えた世界の中にいた。もちろん、まだ十代であるから、それなりの悪ふざけもし、友人との交流もあったが、ともかく、広範な科目について、徹底した詰め込み教育体制の中にいた。　楽しかった思い出と厳しい競争の思い出とが入り混じった高校生活であった。　しかし、あの頃に詰め込まれた、いろいろな科目の知識は、今でも自分に計り知れない基盤を与えていると私は自覚している。　世界史、数学、物理、英語、生物、地学、等どれをとっても、それが言える。その頃に出会った先生方に面白い人が多かったせいかもしれない。「人は、詰め込まれるべき年代に詰め込まれなければならない」という私の持論がここから生まれたように思う。「詰め込み無くしては、創造のアイデアは生まれない」と、私は確信している。　世界史のＳ先生は、精悍なラグビー選手であった。ヨーロッパ史の授業の中では、ラテン語のままで板書し、私達はノートを取るのに面食らった。物理のＵ先生は、戦争中には飛行機の設計に携わっていた方であり、毎回、明快な説明で私達を深く納得させた。英語のM先生は、深い学識と明快な説明で絶大な定評があった。生物のM先生は、新潟県のキノコの研究で有名な方である。その著書が今も出ている。　また、カメラと岩石にも極めて詳しく、話題豊富で楽しい毎回の授業により人気が高かった。退職後には、本校の非常勤講師とし

て生物を担当されていたこともある。古文のN先生は、源氏物語を初めからかなりの部分に至るまでそらんじて、私達を驚嘆させた。地理のA先生は、一見，恐そうだが実はとても優しい大男の名物先生であった。

大学時代は、大学紛争と安保沖縄問題の騒然とした社会の中で、腰を落ち着けて勉強した記憶がほとんどない。大学内の雰囲気にもなじめなかった。一方、実験だけは無性に面白く、そのリポートを書くために、授業をサボって図書館で参考書を読みあさっていたことを、今も懐かしく思い出す。期限外のそのリポートを担当の先生は受け取ってくれた。学部時代をそうして過ごした。大学院時代においても、実験研究に没頭した。私は、今でも実験が大好きである。　そのせいか，提出期限なんぞ無視して一生懸命勉強し、期限に大分遅れて分厚い実験リポートを提出してくる学生にたまに出会うと、昔の自分を思い出し、嬉しくなり、感激することがある。そうした勉強は、後に大きな知的財産となって自分の中に残るのである。「そのエネルギをそのままずっと持ち続けて欲しい」と彼の後姿を見ながら私は祈るのである。

そして、その反動からか、楽勝科目と難関科目の情報をしっかりと仕入れ、定期試験を要領良く「かわす術」を覚え、安っぽい「処世術」だけをしっかりと身につけ、小利口になって老成し、高専の 5 年間を「要領良く逃げ切って、早く就職したい」と思っているような学生に出会うと、無性に情けなくなり、「もっと、自分を大事にしたらどうだ」と言いたくなる。「ちっぽけな奴だ」と腹立たしくもなる。そして、同時に、そんなケチ臭い考えを、一体どこで身に付けてきたのか、とふと寂しくもなる。

今の日本では、高専の卒業者には、国立大学へ編入学できるとても広い道が用意されている。特にこの長岡高専では、在学中の成績にはほとんど無関係に、毎年、大勢の学生が編入学を実現させている。つい７、８年前までは、高専にとって、とてもこういう時代ではなかった。そうであれば、今日、この好条件を利用しない手はない。　諸君は、普通に勉強しているだけで、必ず、国立大学のいろいろな学部、学科へ編入学できる恵まれた学校の学生なのだ。　工業高専という環境の中での数学、物理を始めとする多くの科目の勉強は大変だと思う。しかし、自分で望んで入った学校だ。高専での勉強を土台とし、次のステップへ、是非とも踏み出して欲しい。

「自分は将来何がやりたいのか、が分からない」、「自分にはどんな仕事が向いているのか、が分からない」。　高専の学生諸君の中から、こうした声をよく聞く。　しかし、その迷いは高専の学生では当然のことなのだ。

自分で望んで 5 年制の工業高専に入学したとはいえ、同級生の中に医学部へ行く者もいない。文科系へ進学する者もいない。普通高校のクラスに比べて、高専のクラスは単純で閉ざされた小さな集団だ。そうした中にあっては、19 や 20 の年齢では、将来の道を決めることができないのは当然のことだ。もし、それが出来た者がいるとすれば、それは、極めて特例だと思う。そして、それはとても危なっかしく思える。

何を食べたいか、注文したいか、と聞かれてもメニューを見せられなければ、答えられないだろう。自分はどんな職業に向いているか、と自問しても、世の中にどんな仕事があるのか、が分からなければ、答を出せないだろう。何を勉強したいか、と問われても、学問分野のメニューを見せられていなかったら、答えられるだろうか。諸君はまだ、高専の中で、多様な学問分野のメニューを見せられていないのだ。ところが、それを、見せてくれるのが編入学した後の大学生活である。

大学生活の意義として、以下の 3 点を挙げたい。まず、自分の新しい興味（学問分野）を発見する（出会う）こと、次に、将来の自分の仕事を見つけること、最後に、自分とは別世界に生きてきた新しい友達に出会うことである。大学には、高専とは全く異なる、広い、そして、新しい出会いの世界がある。大学には、自分をもっともっと大きくできるチャンスが待っていることを、ここに明言しておく。ともかく勉強し、編入学すること。その価値が大学にはある。行き先は、機械、電気、電子、情報、のみならず、数学、物理学、生物学、化学、材料科学、環境工学、医学、法学、文学、経済学、政治学、など何でも良い。

働くことはいつでもできるのだ。金を稼ぐことはいつでもできるのだ。しかし、「学ぶことは、機会を逃がしたら、難しい」のがこの日本だ。「即戦力」なんぞは、一歩間違えば「使い捨て」にもなりかねない。高専卒にとって、大学卒、大学院卒の壁は絶対的に厚い。どうか、自分を大切にし、次のステップを目指して欲しい。

繰り返そう。高専での学生生活の中で、安っぽい「処世術」を身につけ、小利口になって老成した青年になって欲しくない。高専での学生生活を、そんな使い方にしてはならない。自分を大切にし、必ず、次のステップを目指すこと。高専だけでは、自分に結論を出すのはまだ早い。　　（2002 年 秋 ）